

勉強会対象地域（板橋区赤塚地域）は、赤塚城跡、都立赤塚公園西側に位置し、自然と歴史と文化の里・武蔵野の香りが今なお残るエリアです。赤塚氷川神社や清凉寺境内、赤塚乳房大神には、長い年月を経た大径木があります。それらは、豊かな緑の資源であると共に、まちの景観に風格を与える地域のランドマーク、地域共有の財産として、板橋区の“保存樹木”に指定されています。

大きな木がまちなかにあることの良さ（資料1）を感じる人が多い一方で、都市化が進む今日、落ち葉や越境枝等の問題で、本来の樹形を残すことが難しくなっているケースも少なくありません。豊かなみどりのまちを次世代に残していくためには地域の方々の理解と愛着が不可欠です。

本日は、紅葉（資料2）が始まった秋のまちなみを楽しみながらまちの木に対する理解を深め（秋の木の果実紹介、資料3）ぜひその良さを感じてみましょう。

■まちなかの樹木の効果

- 緩衝効果：大きな音の緩和、周辺からの目隠し、道路の視線誘導
- 経済効果：みどりのある場所に人々が集まることで、周辺の経済が活性化します。
- 修景・教育効果：景色をつくる（演出する）、暮らしの楽しみをつくる
- 生態系の保全効果：生き物の生息空間をつくる
- 環境緩和効果：空気を綺麗にする、土に保水し、ろ過する
- 緑陰効果：日陰や涼しい風をつくる
- 防災効果：延焼防止、ガラス等の飛散防止、防風

■資料1. まちなかの樹木の効果



引用：ねりまみどりのまちづくり広報誌「こもれび」
発行：（公財）練馬区環境まちづくり公社みどりのまちづくりセンター

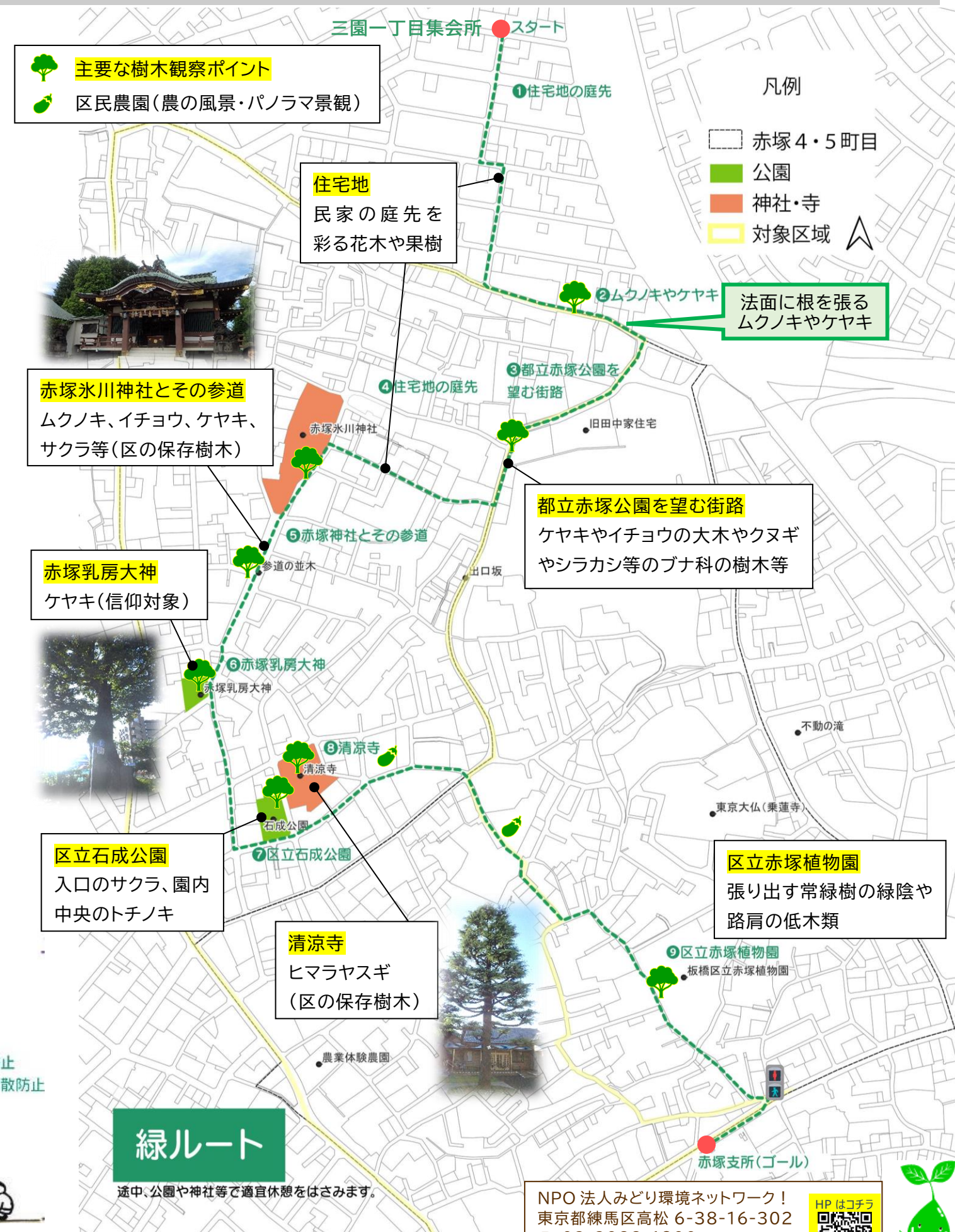


■対象地で見られる“秋の木の果実”紹介

- 風散布型：イロハモミジ（ムクロジ科）、ケヤキ（ニレ科）、サルスベリ（ミソハギ科）など。
 - 生き物散布型：エノキ・ムクノキ（アサ科）、クヌギ・シラカシ・スダジイ（ブナ科）、ピラカンサ（バラ科）、トウネズミモチ（ネズミモチ科）など。
- 様々な方法で運ばれた種による“実生木”を、まちのあちこちで見ることができます。

■板橋区の保存樹木制度（区HPより一部抜粋）

板橋区では、良好な形状を持つ樹木で次の基準を満たすものを保存樹木として指定しています。大きさだけでなく保存樹木としてふさわしい風格があり、所有者や地域から大切に思われていることが重要です。（大きさの基準は高さ1.5mの位置で幹周りが1.2m以上。保存する意思があることを示す同意書の提出が必要。）指定されると管理にかかる経費の一部を助成される制度があります。所有権、管理責任は所有者の方のまま残ります。保存樹木にふさわしい樹形を保つような剪定をお願いしています。



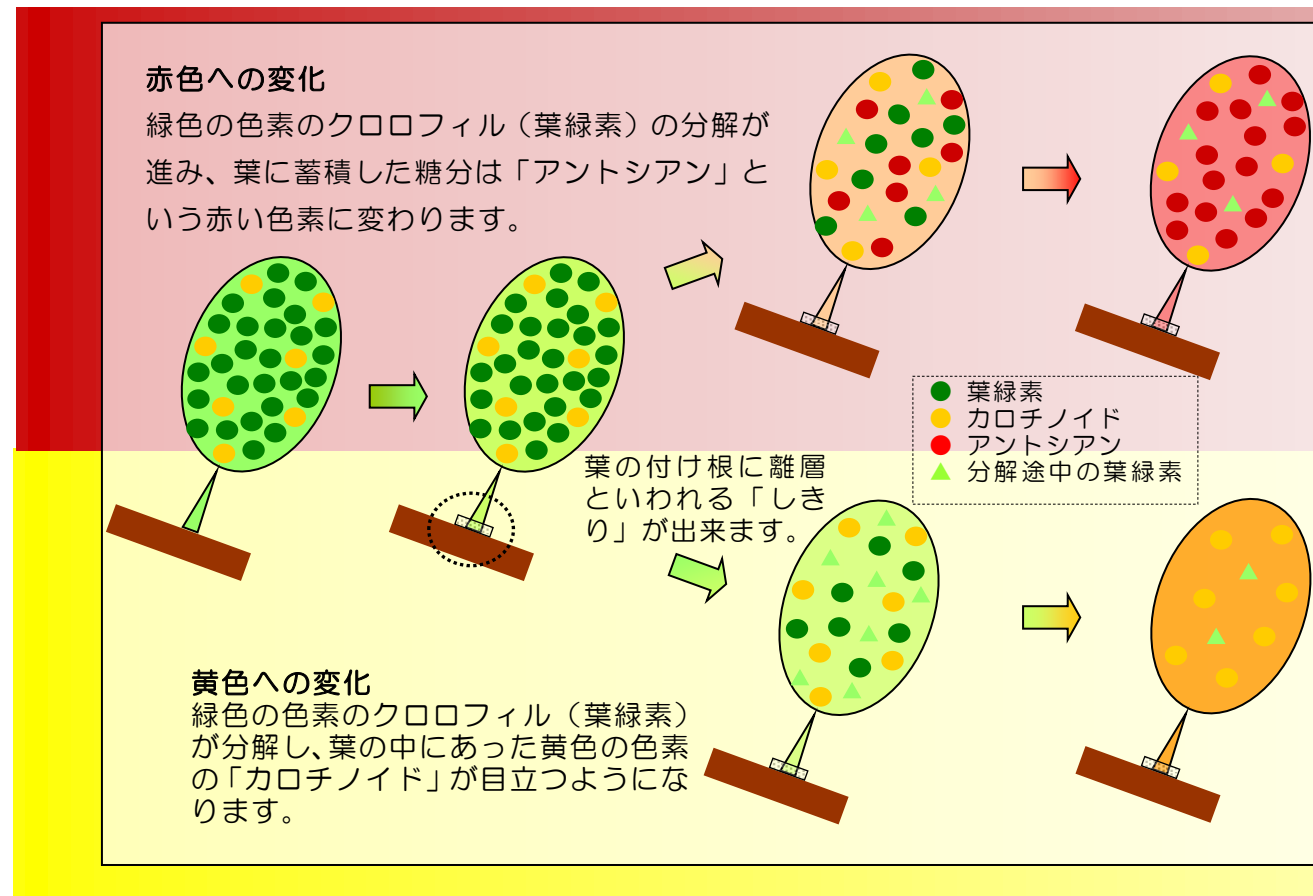
NPO 法人みどり環境ネットワーク！
東京都練馬区高松 6-38-16-302
☎ 03-3922-1890
✉ info@midorikankyo.netx



■資料2. 紅葉・黄葉の仕組み

秋から冬にかけて、気温の低下とともに葉柄の付根の部分に離層と呼ばれるコルク層がつくられ、葉と枝の間で水や養分の流れが断たれます。こうなってもしばらくの間、葉では光合成により糖分が作られ蓄積されます。この糖分からアントシアンという赤い色素が葉の内部で作られ、葉緑素が分解されて

緑の色素が減少していきます。この過程を経て葉が徐々に赤く変わります。これに対して、葉の中の葉緑素（クロロフィル）が分解されていく過程で、今まで目立たなかった黄色のカロチノイドという色素が目立ってくると、葉の色は黄葉になります。植物の種類により、この過程には個性があり、紫、赤、橙、黄というように様々な色が形成されます。



■紅葉する樹木



モミジ類（イロハモミジ）



サクラ類



ハナミズキ

■黄葉する樹木



イチョウ



ムクノキ



エノキ

■資料3. ブナ科の樹木とその問題～カシノナガキクイムシとナラ枯れ病～

落葉樹のクヌギやコナラ、常緑樹のシラカシやスダジイといったブナ科の樹木は、古くから薪炭林、防風林などとして、人々の生活に深く関わってきました。武蔵野の面影を感じる樹種の一つとして、公園等にも多数植えられてきましたが、現在、まちのあちこちで本種の大径木が枯れていく、ナラ枯れ病という病気が蔓延し問題となっています。

ナラ枯れ病とは正式には「ブナ科樹木萎凋（いちょう）病」といい、1990年代に関西地域の山の中でミズナラやコナラなどのナラ類（どんぐりの木）の葉が萎れて、集団で枯れる現象が各所で起こりました。当初は原因不明だったのですが、枯れた木から分離したカビをミズナラに接種した結果、同じ症状で枯れたことから、病原菌（ラファエリア菌＝ナラ菌）が特定されました。そして、この菌を仲介するのがカシノナガキクイムシ※という、昔から日本にいる甲虫だということも分かりました。これが発表されたのが1998年で、発病のメカニズムが分かってから20年余りの間に被害がほぼ全国に拡大しました。身近な公園でも被害を目の当たりにしています。防除法はあるのですが、何本もの大径木を守るとなったらその費用は莫大な金額になってしまい、守り切れないのが現状です。

※カシノナガキクイムシ（通称カシナガ）は4～5mmの黒っぽい円柱形の甲虫（カブトムシなどと同じ）の仲間です。雌の背中には菌のう（マイカンギア）とよばれる貯蔵器官があり、その中に「ナラ菌」が入っています。「ナラ菌」が樹木内で繁殖すると道管の機能が失われて枯れてしまいます。ナラ枯れ病被害が増加した背景には、薪炭林施業が行われなくなり、大木が低規定に伐採されず、人間によって放置されたナラ類の大木や衰弱木を使い、急激に本種が増えてしまったことを認識する必要があります。

